牧野信一「地球儀」論

――英語教科書の機能を中心として――

青木　怜依奈

一

牧野信一の「地球儀」（『文芸春秋』大12・7）は、私小説としての形式を備えながらも他の父親小説とは異質であることが従来指摘されてきた作品である。「地球儀」の主人公〈私〉は、祖父の一七回忌のために帰郷した際、思い出の品である地球儀を手にしたところから父親との関係に思いを巡らせる。父親との思い出を書きかけて放置していた〈一つの短篇〉を想起した〈私〉は、父と〈彼〉（＝かつての〈私〉）との理想的な関係を描こうとしていた過去の創作態度に気付かされることになるのである。

父親小説とは、牧野の父・久雄との関係にフォーカスした一連の私小説作品のことで、「熱海へ」（『新潮』大12・6）を端緒とし「父を売る子」（『新潮』大13・5）がその掉尾を飾る。「父を売る子」でも触れられた父の死後、作品の題材は厳格な母親に対する憎悪へと移っていくのだが、「父親小説」の評価は牧野の文壇における地位を確実なものとした。[1]「地球儀」は「熱海へ」の翌月に発表された作品なのだが、父の醜態ではなく理想化されたイメージが展開されているために、他作品との相違が指摘されることになった。

〈牧野信一氏の「地球儀」はちやんと纏つてゐる〉という書き出しの同時代評は、[2]〈一体此人は誇張して物を考へ誇張して表現するのが癖らしいが、センシチイブなところは面白いが、しかし過ぎては小うるさくなる〉とした上で、神経的な心理描写という初期私小説の特徴が「地球儀」では抑制されていると指摘していた。こうした指摘は〈僕は

牧野信一君の「地球儀」といふのは鳥渡器用だと思つた〉[3]という芥川の評とも一脈通じている。近年の研究でも「地球儀」は〈〈父を売る〉一連の作品の一つではない〉[4]、〈〝父親小説〟の間にはさまれて発表された『地球儀』〉[5]と位置付けられている。

父親小説の間にあって「地球儀」が異質な作品であるのは確かだが、そこでは過去がただ美しく回想されているのではなく、〈一つの短篇〉を〈「お伽噺」〉だとして羞恥する〈私〉により過去に執着している自己の幼稚さが批判されてもいる。そうだとすれば、こうした批判に晒されてなお理想的イメージが担保されるのはなぜなのだろうか。ここで重要なのが、そうしたイメージが英語教科書の一節を介して立ちあらわれているという点である。〈「お伽噺」〉という自己批判も、〈一つの短篇〉における英語教科書の機能と対応していると考えられる。本稿ではそうした英語教科書の機能に着目し、「地球儀」における理想的イメージの内実を明らかにすることを試みていく。

二

戦後「続短篇珠玉集」という企画で「地球儀」が取り上げられた際、河上徹太郎は同作を〈〈牧野の創作活動における—引用者補〉第一期の代表作〉とした上で〈彼がその第二期の幻想の糧となつた父親の放浪癖とデカダンスの血統を基調としての、彼の一家の家庭生活と、その中に閉ぢ込められての彼のユーモアとペーソス〉が描かれているとした[6]。中期の幻想的小説にも繋がる理想的イメージの展開を探るにあたり、まずは、牧野の伝記的事実を確認することから始めたい[7]。

よく知られるように、父・久雄は長男（信一）の誕生を待たずに渡米し、軍艦の乗組員などをしながら実に九年間を海外で暮らした。父の在米期間中、牧野は折に触れて送られる絵葉書やプレゼントによって異国の文化に接し、その経験が幻想的小説におけるエキゾチスムに影響を及ぼしたとされる。牧野の父方の祖父・英福（ひでとみ）が五九歳で急死したのは明治三八年八月のことで（この時牧野は一〇歳）、久雄は父の死をきっかけに帰国した。また英福の一七回忌が滞りなく行われたとすれば、亡くなった一六年後にあたる大正一〇年ということになるだろう。

「地球儀」はこれらの事実関係をおおむね踏まえている。ただし作品内現在を作品発表時とするならば、〈私〉が〈祖父の十七年の法要〉のために〈二タ月振り位ひで小田原の家へ帰〉ったのは大正一二年ということになる。この点は

作品における〈フィクション〉と言ってよく、[8]作者の生々しい感情が投影していることを強調するための操作だろう。〈英一といふのは去年の春生れた私の長男である〉という記述については、牧野の長男・英雄が大正一一年六月に誕生した事実と合致している。

では〈一つの短篇〉の設定についてはどうだろうか。まずは〈彼はこの年の春から尋常一年生になる筈だつた〉という記述だが、信一が母の勤める尋常小田原小学校に入学したのは明治三六年四月のことで、この前後からカトリック教会の宣教師に英会話とオルガンを習ったという。こうした時間設定は、祖父の〈「いよ〳〵小田原にも電話が敷けることになつた。」〉という発言とも符合する。小田原に電話が開通したのは明治三六年四月のことであり、翌年三月に実際の電話交換業務が開始された。[9]

地球儀にもモデルの存在が指摘されている。[10]中戸川吉二が作成した「牧野信一年譜」には、[11]明治三六年の出来事として小学校入学と並び〈米国の父より地球儀送り来る。祖父と共に赤鉛筆にて地球儀に、各地を転々する父の位置をばしるす。〉と記されている。祖父が購入したという〈一つの短篇〉の設定とは相違するが、牧野と交流のあった中戸川が伝え聞いたものである可能性が高い。地球儀は江戸時代にすでに製作されていたが、明治初期には地理教育の教材として使用されるようになった。[12]祖父とは違い〈得意気な手付で〉地球儀を用いる母の姿には、小学校訓導を務めた母・エイの姿が投影されていると言えよう。

以上をまとめると、実際には大正一〇年に行われたであろう祖父の一七回忌が、作品発表時にあたる大正一二年の出来事とされ、その約二〇年前の家庭の様子が〈一つの短篇〉に描かれていることになる。ここで問題となるのが、〈一つの短篇〉における父と現在の父との差異であり、父親像の変化をもたらした時間の経過を〈私〉がどのように捉えているかという点である。回想される過去と現在のいずれにおいても、父親が不在であるという状況が共通するのだが、不在の父を代理するかのように地球儀が存在し、[13]地球儀を介して〈私〉と父親との関わりを把握することができるのである。

父は過去には遊学のために、現在は遊蕩のために不在であるのだが、〈私〉は〈一つの短篇〉にそうした不在の意味の変化、地球儀に投影された父親像の変容を書き込んではいない。過去を美しいまま保存したいという願望を、〈私〉は当初認識してはいなかった。父の放蕩と家の崩壊を〈もうお父さんの事はあてにならないよ〉〈もう家もお終ひだ〉

と嘆じる母親に、金銭的援助を受けているらしい〈私〉は安易に同調を示すのだが、ことさら楽天的に振る舞おうとするその態度は話題が地球儀に転じることで一挙に揺らいでいく。母が〈たゞでさへ狭いのにこれ邪魔で仕様がない〉と邪険にする地球儀を、〈私〉は〈一つの短篇〉という〈極めて感傷的に書き出〉された作品のモチーフとしていたことに狼狽えるのである。

〈一つの短篇〉では父の不在がもたらす家庭内の寂寥と和合とが、回想する現在の認識を持ち込まれることなく、就学前の幼い〈彼〉の眼差しにおいて捉えられていた。地球にどこまでも穴を穿てばアメリカに突き抜けるだろうと言って皆を笑わせる祖父の、息子への思慕をたたえた寂しげな表情、地球儀を弄びながら〈「早く帰れ〳〵」といふ風〉に念ずる〈彼〉の父への憧れ。〈私〉はこうした〈一つの短篇〉の内容を想起すると同時に、その趣向を〈「お伽噺」〉と呼んでみせる。〈丁度「お伽噺」の事を思ひ出した処だつたので、突然テレ臭くなつて慌てゝ母の傍を離れた〉という際のこの形容が、〈一つの短篇〉における空想性への批判であることは明らかである。

柳沢孝子はこうした批判的意識が、夢を壊した父に対してではなく、その不在という状況下で〈実体を持たない父の幻〉を夢見ていた自己に向けられているとする。[14] 日本とアメリカという空間的隔たり、そして回想という行為に伴う時間的隔たりが、異国への憧憬とともに父の幻を育むのである。こうした夢の生成システムを〈「お伽噺」〉と呼ぶことで、夢に裏切られながらも〈今でも夢を追いかけずにはいられない自己の心〉が批判的に把握されていると柳沢は指摘している。

ただしここで注意したいのは、〈一つの短篇〉には実体的な存在としての父が登場していないだけでなく、父にまつわる具体的なイメージが何一つ提示されていないということだ。アメリカに思いを馳せる家族の様子や、父との再会を夢見て英語学習に励む〈彼〉の姿は描かれているものの、〈彼〉の〈早く帰れ〳〵〉という感情が具体的要素と結び付くことはない。ここで理想化されているのは、父という存在自体ではなく、次章で見ていくように、〈彼〉が想起することになる父との邂逅のイメージである。〈私〉の〈「お伽噺」〉という批判が向けられるのも、現実的状況から乖離していく邂逅のイメージの観念性に対してであり、そのことは英語教科書という枠組みと密接に結び付いていたのである。

三

〈一つの短篇〉の冒頭、英語学習に励む〈彼〉に注目したい。

同じ部屋の丸い窓の下で、虫の穴が処々にあいてゐる机に向つて彼は母からナショナル読本を習つてゐた。「シーゼーボーイ・エンドゼーガール。」と母は静かに朗読した。竹筒の置ランプが母の横顔を赤く照らした。「スピンアートップ・スピンアートップ・スピンスピンスピン――回れよ独楽よ、回れよ回れ。」と彼の母は続けた。

ここに登場する〈ナショナル読本〉は、明治期に英語教科書として広く普及した『ニュー・ナショナル・リーダー』（通称『ナショナル・リーダー』）のことである。原書はアメリカで発売されたCharles J. Barnes『Barnes's New National Readers』で、第一巻と第二巻が一八八三年、第三巻から第五巻が一八八四年に刊行された。『ナショナル・リーダー』は英語を第一言語とする者のためのテキストで、周知のように、日本に輸入されて英語教科書として普及し、明治二二年三月に文部省の教科書検定制度が発足してからも高い普及率を誇っていた。[15]

牧野の英語教科書への言及は、大正一〇年代にまで遡ることができる。教科書にまつわる幼少期の記憶が語られているのだが、学校教育の場とは結び付いていないのが特徴的だ。〈幼時余は、母に（中略）ナショナル・りいどる巻の一に依つて英語を手ほどかれ、和訳するんとん万国史を講義された〉[16]とあるように、『ナショナル・リーダー』『スウィントン万国史』という明治期英語教育の定番テキストは、尋常小田原小学校の訓導だった母ヱイの存在とともに想起されている。[17] 英語教科書は母との親密な時間の象徴として位置付けられているものの、その関心を全てノスタルジーの所産に帰するのは適切でないだろう。

先の引用本文中〈シーゼーボーイ・エンドゼーガール〉に該当する内容は確認できなかったが、『ナショナル・リーダー』第一巻「PartI, LessonII」の〈See the boy and the dog.〉を踏まえた表現だと考えられる。また〈スピンアートップ〉以下の箇所は、次に引用する「PartI, LessonXI」の内容に基づいている。

The boy has a big top.
Spin! Spin! Spin!
See how he makes it spin!
Can you spin a top?

Yes, I can spin a top.
A boy likes a big top.

少年が大きな独楽（top）を回して遊ぶシーンを例に、基本的な語句（top, has, spin, how, he, makes）の用法を確認するレッスンである。文章には内容に即した絵（独楽で遊ぶ少年とそれを眺める少女）が添えられ、本文次のページには学習事項の復習（Reading Review）やスペリングの確認（Spelling Review）、筆記体の練習（Slate Exercise）の項目が記載されていた。

牧野はこの独楽を用いたレッスンに関心を抱いていたらしく、「冬の風鈴」（『文芸春秋』大15・4）における回想シーンでも母との英語学習のテキストとして〈シーダボーイエンドダガール（See the boy and the girl.）とか、スプラーシユドダオーター（Splashed the water）とか、スピンアートップ、スピンアートップ（Spin a top）〉が挙げられ、〈自分は、独楽のことをアートップと覚えた〉と語られていた。[18] この独楽のレッスンは、当時英語教育を受けた者には印象深いものだったらしく、牧野とほぼ同年代の西脇順三郎も次のような回想を残している。[19]

私は中学のときはこの読本は学校で用いなかったが、家で自習したのであった。それでそれは私にとっては唯一のアメリカの世界であった。第一巻を今見てみると非常になつかしいもので、そのさし絵などはモナリーザをよく覚えているように覚えている。コマをまわしている少年の絵（The boy has a big top. Spin! Spin! Spin!）やまたヤマメをガラスの鉢に入れて母親と少年がその山の川魚の話をしている絵や、老人の前で一人の少年がフリュートを吹いている絵もよく覚えている。

西脇順三郎「「ナショナル・リーダー」とアメリカ」

明治期に英語教育を受けた者にとって、『ナショナル・リーダー』を初めとする舶来教科書は、異国情緒溢れる内容により西洋文化の窓口となっていた。[20] そしてそのような異国への憧れは、海外渡航という現実的な行動が伴わないからこそ、教科書という枠組みの中でより一層掻き立てられたのではないか。

〈一つの短篇〉においても、英語は〈彼〉と父の居るアメリカとを結び付けるツールとして位置付けられながらも、〈彼〉が勉強に励んでいたのはその実用的な機能ゆえではない。〈「純一は少しは英語を覚えたのかね。」〉〈「大学校を出たらお前もアメリカへ行くのかね。」〉という祖父の問いかけに、〈彼〉は自慢げに首肯してみせるものの、〈若しお

父さんが帰つて来て了つたら？〉と聞かれると、行くと答えながらも内心は〈そんな気はしなかつた〉と語られている。国内電話の整備がようやくという状況下で、またアメリカに渡るには幼な過ぎる〈彼〉にとって、英語学習はアメリカとの繋がりを担保するほぼ唯一の手段であった。それと同時に、英語によって〈彼〉が繋がれるのは実際のアメリカではなく、地球儀や英語教科書の延長線上に仮構されるところの観念的な異国なのである。

そのため父への思慕の高まりは、〈彼〉にアメリカに渡航する未来や父のありうべき姿を思い浮かべさせるのではなく、英語教科書との一体化という現象へと結び付いている。

彼は誰も居ない処でよく地球儀を弄んだ。グル〳〵と出来るだけ速く回転さすのが面白かつた。そして夢中になつて、

「早く廻れ〳〵、スピンスピンスピン。」など、口走つたりした。するといつの間にか彼の心持は「早く帰れ〳〵」といふ風になつて来るのだつた。

回転する地球儀に〈彼〉が早く廻れと命じる構図は、『ナショナル・リーダー』における少年と独楽の位置そのままである。アメリカに思いを馳せながら地球儀を弄ぶことが、〈彼〉の中では英語教科書に同化することと等価なのだ。〈彼〉の夢想しているのは、実際に訪れることのできる空間であるよりも、教科書内に存在する言語としてのアメリカなのだと言えよう。

このようなアメリカの位置付けは、〈彼〉が想起するところの父との関係性にも重なる。父が帰国したならばアメリカには行かないだろうと密かに思う〈彼〉にとって、父は異国での邂逅を夢見るとともに、それ以前の帰国が望まれるアンヴィヴァレントな存在である。異国への憧れと一体化した他者としての父と、自らもその血縁であるところの懐かしい父のイメージが併存することで、自らの海外渡航も父の帰国のいずれもが現実的な問題になることなく、父との「再会」が具体的なイメージを欠いたまま理想化されているのである。

自らが異国に赴くことで、また父が異国から帰還することで「再会」が果たされるとするならば、それは実現不可能な夢想であると言えよう。しかし英語教科書という受け皿は、そうした観念的にしか存在しえない「再会」という発想を言葉として定着させる。先ほど引用した場面には、そのような夢想と英語教科書の言葉の交わりが写し取られていた。独楽のテキストを〈早く廻れ〳〵〉と口ずさむ〈彼〉の心中で、spinに対応する日本語の意味が〈廻れ〉から〈帰

れ〉に変質している。〈彼〉が少年の視点に一体化していく言葉の脈絡が、ここでは同時に父を日本へと誘うメッセージとしても機能しているのであり、こうした破格の用法に依拠することで「再会」を夢見ることが可能になるのである。

四

〈一つの短篇〉に描かれていたのは、英語教科書の内部に仮構されたアメリカにおいて、〈彼〉が赴くとともに父がそこから帰還するという「再会」のイメージであった。それは英語教科書という場と結び付いた夢想であり、そうした夢想を育みうる言語体験そのものが、非常に限定的にしか享受しえない夢のようなものだと言える。しかしそのような体験が長続きすることはない、というのも言葉が対応している事物に実際には触れていないことがその要件であるからだ。

言葉の内部で完結している理想的イメージに浸り切る、そうした夢のような時間から、父の帰国後の時間を生きている〈私〉はすでに弾き出されている。そしてそのことと対応するように、〈一つの短篇〉を〈「お伽噺」〉として退けた後の〈私〉の振る舞いには、言葉にまつわる欠落感がありありと窺えるのである。帰郷の翌日、親類一同が集まった席で〈私〉は父の代わりに挨拶を任される。

「今日はわざわざ御遠路の処をお運び下さいまして……（えゝと？）……実は……その誠に恐縮なことで……その実は父が四五日前から止むを得ない自分自身（オツといけねエ）……えゝ、止むを得ない自分用で、実はその関西の方へ出かけまして、今日は帰る筈なのでございますが未だ……それで私が……（チョッ、弱つたな）……どうぞ御ゆるり……」

私はこれだけの挨拶をした。括弧の中は胸での呟き言だつた。ちやんと母から教はつた挨拶で、もつと長く喋らなければならなかつたのだが、これだけ云ふのに三つも四つもペコ〳〵とお辞儀ばかりしてごまかしてしまつた。そしてこの挨拶のしどろもどろを取り直すつもりで、胸を張つて出来るだけ尤もらしい顔付をして端座した。だが脇の下にはほんとうに汗が滲んでゐた。

内容を事前に確認していたにも関わらず、〈私〉の挨拶は断片的な言葉の羅列となり、一つのまとまりある意味内容を提示できていない。〈私〉にとっての言葉とは、生身の肉体により発せられることで意図しない意味を派生させ、言

うべき意味を取り落としていることを羞恥心とともに自覚させるものでしかないのである。

〈私〉のこうした言語運用上の問題は〈一つの短篇〉の挿話とは対照的だ。英語教科書を口ずさむ〈彼〉において、言葉（spin）はその本来の意味（〈廻れ〉）を変質させながら想念（〈帰れ〉）と結び付いていたのに対し、〈私〉は発話された言葉と〈胸での呟き言〉としての想念との分裂を抱えている。というよりこうした欠落感こそが、〈一つの短篇〉という回想の原動力なのだろう。ただしそのような過去を想定することは、現在を過去に劣るものとして位置付け、以後の〈私〉の言語活動における不備をあらかじめ認めることに外ならない。一度は着手された〈一つの短篇〉を、〈私〉が〈「お伽噺」〉として批判しなければならなかった所以である。

〈一つの短篇〉を〈「お伽噺」〉だとする〈私〉の批判はしかし、その価値を否定するよりもむしろ、自らを慰撫しようとした〈私〉の欠落感を強調してしまう。それは同時に、子どもの眼差し、英語教科書という特殊な枠組みというファクターにより可能となった〈一つの短篇〉内の情景を、憧憬の対象として浮き彫りにすることでもある。言語的な欠落感を抱いた〈私〉が、過去を否定しようとすることでむしろ過去の理想的な体験を喚起してしまうという円環構造が「地球儀」において示唆されているのである。

五

以上のように、「地球儀」においては英語教科書に媒介された理想的イメージが展開されており、そのために他の父親小説とは異質な性格を有することになった。ただし「地球儀」と父親小説との間には、共通の問題意識も存在していたと考えられる。ここで改めて牧野の英語教科書観について確認してみたい。

「地球儀」の約一年後に発表された「吾家の随筆」（『文芸春秋』大14・6）には、従妹にせがまれた〈私〉がナショナル読本中の〈怠惰な鼠といふ一章〉を翻訳する場面があり[21]、そこでは以下のような英語教科書への執心が語られていた。

私は、初歩英語読本が随分好きだつた。往年それらの聚集モノメニアに陥つて、海外の知友の助けまでかりて幅は三尺位ひだが四段になつてゐる書架を一杯以上にしたことがある。十年も前のことなんだが、その為に英語のほんとの勉強を疎かにして今もつて初歩英語以上の知識は備はらず、馬鹿を見たと思ふこともあ

る。だがその文庫は随分私を悦ばせて呉れた。モノメニアには違ひなかつたのだ、単純なものを悦び始めれば限りがないからな！　一種の神経衰弱病である。そんな時には小学一年の国語読本の第一章を思ひ出して、ハ、ハタ、タコ、コマ、マリ、マツニツキ……など朗吟しても涙が滾れる、“Are you a man?” “Yes, I am a man.” “Are you a girl?” “No, I am a boy.”――そんなことを呟いても、何だか面白くなつて、肚に力を込めたりするのだ。

言語を習得するための教材としてではなく、むしろ実用的な目的から外れているからこそ、〈私〉は教科書類に〈単純なもの〉としての喜悦を覚えている。内容を伝達するために使役される日常言語とは違い、言葉の使い方の例であること以上の意味を求められない、単純で自足した理想的な言葉の世界が透視されているのである。

「地球儀」における英語教科書の位置付けと重なるこうした理想的イメージは、牧野の初期私小説における課題と表裏一体のものであったと言えよう。自己について赤裸々に語ろうとするほど「私」について語られた言葉は「私」から乖離してしまう。言葉と対象との不一致という自己語りの困難に、牧野が非常に自覚的であったことはよく知られている。そのような困難の認識があるために、言葉と対象との不一致が解消された理想的な言語空間という英語教科書のイメージが作り出されたのではないか。自己を十全に語りうる言葉が存在しないからこそ、自足した言葉の世界としての英語教科書が、憧憬の対象として機能しえたのである。

このような英語教科書の位置付けやそこから発する夢想が、「地球儀」以外の初期私小説において前景化することはないのだが、英語教科書に由来する表現は初期以降の作品においても継続して見られる。特に重要なのが、幻想的小説と密接な関わりがあるギリシャ神話の受容に英語教科書が寄与していた点である。「沼辺より」（『新潮』昭８・３）という作品には、お雪に英語の指導を頼まれた〈僕〉が〈ナショナル・リーダーの三の巻〉の〈「ア、ゴールデン・タツチ。」〉という物語を読み上げさせる場面がある。〈「わんす・あぽん・あ・たいむ、ぜあ、りぶど、あ、きんぐ、ねいむど、マイダス……」〉として始まる物語は、実は『ナショナル・リーダー』ではなく、同じく輸入ものの教科書である『Chambers's narrative series of standard reading books.』第三巻（W. & R. Chambers, 1863）に収められている。第三巻「THIRD PART.」に「Midas, or the Golden Touch.」

が収録されており、「沼辺より」ではその冒頭〈Once upon a time there lived a very rich man, and he was a king besides, whose name was Midas.〉が踏まえられていたのである。触れたものを黄金に変えてしまうこのミダス王の伝説の他、同書にはギリシャ神話由来の物語が多数収録されている。[22] ギリシャ神話を教科書の内容と位置付けているのは「沼辺より」のみだが、牧野のギリシャ神話受容を把握するためには、英語教科書との関係性を考慮することが不可欠だと言えよう。

「地球儀」における表現の特質はまた、書物の中に立ちあらわれる理想的イメージという点でも幻想的小説との連続性を有している。幻想的小説においては、自己語りにおける「私」の複数性が前提とされるとともに、実体としての対象から遊離している言葉の機能も、一つの魅力的な世界像を結ぶものと位置付けられることになる。そこでは〈お伽噺〉という形容も批評性を失い、積極的な意味を付与されるのである。「R漁場と都の酒場で」(『経済往来』昭5・8)から、〈私〉が村の子どものために〈「シノン物語」といふ作者不明の絵本〉を入手した場面を見てみよう。

「シノン！　シノン！　シノン！」

私は、彼の兵士の名前を声を限りに呼びあげてゐた。呼べば応へがある――かのやうに私は夢を忘れ、時を忘れ、忽ち作中の人物等と共に同じ空気を呼吸してしまふのが病ひであつた。――だから私は、滅多に本を読まぬことに努めてゐたのであるが、愛する子供のために東京に注文しておいた騎士物語の一部が駅留便で着いたので、さて、これを、何んな風に面白気に翻訳して、読み聞かせてやらうか？　と思つて、早速歩きながら封を切つて、下験べをはじめて見ると忽ち自分自身が囚はれの身になつてしまひ、思はず力んで剣を振る、眼を据ゑて不思議な唸り声を挙げる……何うにも仕方がなくなつたので私は、慌てゝ道を変へて人通りの無い、裏山へ向ふ野良路に走つたのである。

トロイア戦争における有名な木馬作戦で、敵方との交渉役を務めたシノンの物語は、本来の読者である子どもより先に〈私〉を魅了してしまう。〈私〉はこれに続く箇所で、「シノン物語」とともに入手した複数の書物を〈お伽噺〉と呼んでいるのだが、〈お伽噺〉という形容が意味するのは空想性への批判では無論ない。物語に没入し、英雄と一体化することを可能にする機能が、〈お伽噺〉において見出されているのである。

これまで初期私小説から幻想的小説への変遷について

は、一人称小説における語りという視座から分析が進められてきた。「私」が「私」について語ることとその困難が、「私」ならざる「私」を析出していく構造を生み、後の幻想的表現に結び付くことになる。そうした語りの特質が幻想的小説成立の原動力だったことは確かだが、言葉の脈絡から生まれる夢想は「地球儀」においてすでに描かれていた。「地球儀」における理想的イメージの展開には父親小説とは異質な要素が多分に含まれていたが、むしろそこにこそ幻想的小説を構成している表現の萌芽を認めることができるのであり、作風の変遷要因や幻想的小説の表現構造を解明する上で「地球儀」の位置は重要な意味を持つと考えられるのである。

※牧野信一からの引用は、『牧野信一全集』（全6巻、筑摩書房、平14・3～平15・5）に拠り、旧字は適宜新字に改めた。

【注】

（1）新進作家叢書の一冊として刊行された『父を売る子』（新潮社、大13・8）が、「熱海へ」「スプリングコート」「父を売る子」を含む七作品で構成されていたことは、牧野の評価と「父親小説」の結び付きを物語っている。

（2）吉岡保治「続七月の創作評　四」（『時事新報』大12・7・18）。

（3）「新潮合評会（一）」（『新潮』大12・8）。

（4）大森澄雄「牧野信一―骨肉の倫理―」（『私小説作家研究』誠光社、昭57・4）。初出は「牧野信一素描―とくに骨肉の問題を―」（『国語国文学論集』昭48・4）。

（5）鈴木貞美「最も美しい魂は―牧野信一のために」（『人間の零度、もしくは表現の脱近代』河出書房新社、昭62・4）。初出は『文学界』（昭61・3）。

（6）河上徹太郎「牧野信一『地球儀』」（『文芸』昭27・10）。

（7）牧野の伝記的事実については、『牧野信一全集』第六巻（筑摩書房、平15・5）の「年譜」、薬師寺章明『評説　牧野信一』（明治書院、昭41・12）を参照した。なお年齢については「年譜」と同じく数え年齢で表示した。

（8）「地球儀〔モデル考〕」（『解釈と鑑賞』昭34・3）。

（9）電話の開通は「電話所新設」（『東京朝日新聞』〔朝刊〕明36・4・25）などと報じられ、その業務開始については明治三七年三月一四日付の『官報』「逓信省告示第百八十五号」に〈本月十五日ヨリ相模国足柄下郡小田原電話所ニ於テ電話交換業務ヲ開始ス〉とある。その後の進捗状況も「小田原熱海の電話所」（『東京朝日新聞』〔朝刊〕明36・10・20）、「小田原の電話」（同上、明37・3・15）などと新聞で報じられ

ていた。

(10)「地球儀（モデル考）」（注8参照）。

(11) 宇野浩二等編『牧野信一全集3』（第一書房、昭12・7）。

(12) この時期、地球儀の使用法や経緯度などの基礎知識を解説した参考書が、『地球儀便覧』『地球儀略解』などのタイトルで多数刊行されている。

(13) 大石雅彦は「牧野信一における三つの固有相―物、場、雰囲気」（『彼我等位―日本・モダニズム／ロシア・アヴァンギャルド』水声社、平21・4）において、地球儀は〈不在の父を代行＝表象する物〉であり、〈かつて不在の父をあらわしたそれは、いま父の不在をあらわす〉と指摘している。初出は『交錯する言語　新谷敬三郎教授古稀記念論文集』（名著普及会、平4・3）。

(14) 柳沢孝子「夢見られたもの―描かれた父と母」（『牧野信一イデアの猟人』小沢書店、平2・5）。初出は「夢見られたもの（上）―牧野信一と父」、「夢見られたもの（下）―牧野信一と母」（『早稲田文学』昭61・3、4）。

(15) 江利川春雄「データベースによる日本英語教科書史の全体像」（小篠敏明・江利川春雄編著『英語教科書の歴史的研究』辞游社、平16・8）。

(16) 牧野信一「余話（秘められた箱）」（『新小説』大14・5）。

(17) ヱイは明治二〇年四月から幸学校（尋常小学校の前身）で訓導を努め、在職期間は三〇年三カ月に及んだ。

(18) この〈Splashed the water〉もやはり『ナショナル・リーダー』第二巻「LessonVII」に基づいている。飼っている猿の〈Jocko〉を洗おうとしたところ、酷く水を飛び散らされた様子が〈How he did splash the water!〉と表現されている。

(19) 西脇順三郎「「ナショナル・リーダー」とアメリカ」（未刊エッセイ）。引用は『定本　西脇順三郎全集』第一二巻（筑摩書房、平6・11）。

(20) 渋沢栄一の息子で明治二五年生まれの渋沢秀雄は、『アメリカ往来』（東宝書店、昭23・10）の中で〈ナショナル・リーダーのなかには、国語の読本とまるで世界の違つた、日本にはあり得ないやうな面白い話が多いので嬉しかつた〉と語り、後年再びそれを手にした際には〈初恋の女にめぐり逢つたほど嬉しかつた〉としている。

(21)〈一匹の若い鼠が或る水車小屋に大勢の仲間と共に住んでゐた〉と始まる〈若い鼠のグリップ〉の話は、『ナショナル・リーダー』第二巻「LessonXLV, XLVI」の「THE LAZY RAT」「THE LAZY RAT（Continued）」を踏まえている。壊れかけた巣から引越そうとする鼠たちの中で、怠惰なグリップのみは巣に止まり、最後は巣に押しつぶされて息絶える。冒

頭の〈A young rat once lived in a mill with many other rats. He was too lazy to do any thing〉と「吾家の随筆」が正確に対応しているように、〈私〉の翻訳は原典の内容にかなり忠実なものとなっている。この鼠の名前を採用したと思われるのが、「鸚鵡のゐる部屋」（『令女界』昭5・12）に登場する鸚鵡の〈グリップ〉である。言葉を覚えない怠惰な鸚鵡の様子にも、鼠グリップの造形が投影されているようだ。ちなみに『ナショナル・リーダー』第二巻の「LessonXLIV」はPollyという名の鸚鵡の話である。

（22）同巻の「SECOND PART.」には、「The Expedition of the Argonauts」という英雄イアソンの金羊毛獲得の物語が「OLD WORLD STORIES」のカテゴリーとして収録されていた。このカテゴリーにはギリシャ神話由来の物語が集められたらしく、第四巻には「Tales of Hercules」、第五巻には「The Lotus-Eaters」「Io and Prometheus」、第六巻には「The Cattle of Helios」が収録された。ちなみに牧野作品には〈クリステンダムの七勇士〉（「R漁場と都の酒場で」）という単語が頻出する。これはキリスト教の七人の守護聖人にまつわる伝説を指す言葉で、それぞれは著名な聖人なのだが、当時の日本で七勇士の物語として紹介している文献は管見の限りでは見当たらない。その七勇士の物語が、『Chambers's narrative series of standard reading books.』第四巻中には「The Story of St George of England」「The Seven Champions of Christendom」「St George and the Dragon」として収録されていた。